自分に出来ること

菊 M.T.

夏休みのある日、私は二日連続でお昼ご飯にカップ麺を食べました。ちょうどその日は合宿直後で、合宿では四日間、朝、昼、晩と美味しい料理を出していただきました。家では母が私の好物を作って帰りを待ってくれていたし、お弁当や夕飯もいつも作ってくれています。でもみなさん、手料理を食べていると時々、無性にカップラーメンやカップ焼きそば、コンビニのおにぎり、お惣菜パンが食べたいと思うことはありませんか。私はせっかく母が仕事から帰ってきて忙しい中ご飯を作ってくれているのに、時々「あー、カップラーメンが食べたいなぁ。」と思ってしまうことがあります。実はこれはとても贅沢なことなのだと思います。毎日毎日母が料理を作ってくれているからこそ感じることなのです。だから私のために料理を作ってくれている母に、父に、そして時に合宿の宿の方や祖父母に、しっかりと感謝しなければならないと思いました。私はとても幸せな環境にいるのです。

ある日私は、プラン・ジャパンの Because I am a Girl キャンペーンのチラシを目にしました。そのチラシには「学校に行けない理由は、『女の子だから』」と書いてあり、女の子であるがゆえに過酷な生活を強いられている女性の声が書いてありました。ある 10 歳の女の子は「全ての家事は私にまかされています。兄や弟は私の作ったものを食べて遊びに行くだけです。」と。他の 19 歳の女性は「早すぎる結婚が、先生になりたいという私の夢を台無しにしました。」と。また別の 22 歳の女性は「6 歳のとき、両親の借金の肩代わりに、カラマリと呼ばれる家事使用人になりました。朝から晩まで無給で働く生活を、12 年も続けました。」とありました。最初に挙げた女の子は私よりも 5 歳も年下なのに、家事をすべてしているのです。私はゴミ捨てをすることと、時々夕飯を作るぐらいしかやったことがありません。また、三人目の女性の方は、借金の肩代わりに、たった 6 歳で家事使用人になったというのです。6 歳の頃の私など、保育園で毎日楽しく遊び、初めての小学校生活に胸を躍らせて日々を過ごしていました。日本で見る小学生が、あんなにかわいい小学 1 年生が、まだ 20 歳にもなっていない女の子が、海外では過酷な労働、早すぎる結婚をしているなんて、正直想像もつきません。私は自分の暮らしている毎日が幸せなものだと改めて感じ、この生活が送れていることに感謝しなければいけないと思ったと同時に、少しでもこの女の子たちの力になりたいと思いました。

しかしこのキャンペーンは毎月 3〜5 千円の寄付が求められています。私は毎月おこづかいをもらっていて、自分で稼いでいるわけではないのでこの金額を毎月払うことは厳しいです。それでもチラシの最後にあった角田光代さんの文章から抜粋された「私は非力だ。けれど、何とかしたいと思うところからしか、ものごとは動かない。」という文章から、やはりどんな小さな事でも良いから困っている人の力になりたいと思いました。それには学校で毎月ある献金や、ベルマーク、古切手の回収など今は本当に限られたことしか出来ませんが、自分に出来ることは精一杯やりたいと思います。

またチラシによると、このキャンペーンは日本では 6 万人の支援者と 845 人のボランティアに支えられているそうです。私はそんなにも多くの人が支援していると知って驚き、とても感動しました。これからも一人でも多くの人が「なんとかしたい。」と思うようになれたら良いなと思います。そして何よりも自分が幸せな生活を送れていることへの感謝を決して忘れないようにしていきたいです。